

「日系ブラジル人」のエスニシティ：ブラジル・日本におけるフィールドワークから

山ノ内，裕子
日本学術振興会特別研究員

<https://doi.org/10.15017/7364821>

出版情報：国際教育文化研究. 2, pp.97-107, 2002-03-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



「日系ブラジル人」のエスニシティ

ーブラジル・日本におけるフィールドワークからー⁽¹⁾

山ノ内 裕子

はじめに

ブラジルは世界最大の日本人移民送出国である。ブラジル日系社会の研究機関である、サンパウロ人文科学研究所の調査[サンパウロ人文科学研究所 1987, 2001]によると、1908年の第一回笠戸丸移民から94年を経たブラジルには、2002年現在、一世から五世まで、推定140万人の日系人が居住しており、そして、日系人のうち6割近くが中流階級以上であるという。日系人の人口は、ブラジルの総人口のうちわずか1%弱、サンパウロ州でもわずか3%に過ぎないのであるが、特にサンパウロでは、サンパウロ州立大学をはじめとする名門州立・私立大学の医・歯・薬学部や工学部、そして法学部や経営学部において、定員の10～15%が日系人学生で占められている。しかしその一方で、日本語を母語とする第一世代の減少と日本語を解さない人々の増加、各種日系団体の加入率の低下、二世以降の非日系との結婚の増加も事実であるし、1990年以降急増した日本への「出稼ぎ」現象（日本在住ブラジル人は約25万人）によるブラジル国内における日系人人口の減少もまた事実である。

日本人研究者や現地の一世代の間ではしばしば、「日系人はブラジル社会へ同化し、日系社会は近いうち『衰退』してしまうだろう」というような「消滅の語り」がなされている。しかし、こうした語りは、文化を日本語や血統というような客観的属性のみによって本質主義的にとらえた、一面的な見方にすぎないといえる。なぜなら、日本語が使われなくなっても、各種日系親睦団体に加入していなくても、今なお、ブラジルの日系人の中では、非日系のブラジル人、すなわちブラジルの日系人が言うところの《ガイジン (Gaijin)》に対する対抗的なエスニシティが存在しているからである。これが、特にサンパウロを中心に顕在化する《ニッケイ (Nikkei)》というエスニシティである。

よって本論は、ブラジルと日本の双方において実施したフィールドワークの知見をもとに、この新しいエスニシティについて考察することとする。そして、日系人をめぐるさまざまなエスニック・カテゴリーの運用過程に注目し、彼らがいかにしてアイデンティティを構築してきたかを歴史的、文化的、政治的側面から明らかにしたい。

1 研究の方法

前述の通り、本研究を遂行するに当たって、筆者は日本とブラジルの双方においてフィールドワークを行った。国内調査は1994年10月以降、年に数回、断続的にA市で実施しており、ブラジル調査は1998年12月～1999年4月、1999年7月～12月、2000年6月～2001年1月にかけて、ブラジル連邦共和国サンパウロ州において実施した。なお、本論執筆現在（2002年2月）も、ブラジルにて現地調査中である（2001年12月～2002年3月上旬までの予定）。

フィールドワークでは、《日系ブラジル人》と呼ばれる人々が、他者との関わりのなかでエスニシティをいかに表出し、運用・動員しているかを観察した。同時に、参与観察のみならず日系人およびその家族（非日系人の配偶者等）に対してインタビューを実施し、日系ブラジル人が何をもって自己と他者の間に境界を引くのか、《日系ブラジル人》であることの意味を彼ら自身がどのように解釈しているのか、彼ら自身の語りを通して明らかにしようと試みた。一方、現地調査と並行して、先行研究の批判的検討と日系社会に関する文献・資料の分析によって、日系ブラジル人のエスニシティ構築のコンテクストとなる社会的・文化的・政治的構造の解明を試みた。

2 ブラジル日系人のアイデンティティ構築過程

今日のブラジル日系人のアイデンティティを考えるためには、まずブラジル日系人のアイデンティティの歴史的変遷について概観する必要がある。ブラジル日系人のエスニシティは、常に民族的他者のまなざしによって構築されてきたと言っても過言ではない。いつの時代においても、日本人移民ないしその子どもたちは、ドミナントの白人によって常にまなざされ、弱者のポジションに立たされてきたのである。ブラジル日系人のエスニシティ形成過程は、そうしたポジショニングを崩すための抵抗の歴史であったとも言える。では、出稼ぎ現象以前のブラジル日系移民のエスニシティはいかなるものであったのだろうか。本節では、前山[1996]の論考に依拠しつつ、ブラジル日系人のアイデンティティの歴史的変遷を、日常的実践における、抵抗の「戦術」²⁾という視点から概観したい。

前述のとおり、日本からブラジルへの移民は1908年の第一回笠戸丸に端を発するが、当時の日本人移民は、ブラジル到着前は、日本人としての明確なアイデンティティよりも、むしろ、〇〇県人や〇〇村人といったアイデンティティの方が優勢であったという。しかし、ブラジル到着後、黒人やイタリア系、ポルトガル系、ドイツ系、インディオ、そしてさまざまな混血型のブラジル人と出会うなかで、次第に《ニホンジン (Nihonjin) 》として自覚するようになった。それは、単に日常の生活世界において、民族的他者による《ジャポネース (Japonês=日本人) 》という名づけを引き受けたからのみならず、奴隷にかわる労働力として働くことを期待された、確固たる民族的権力関係を覆すための「戦術」として動員されたものであった。つまり、ブラジルの日本人移民は、「錦衣帰国」³⁾をめざし、「お国の発展のために一時的にブラジルで働いている」と考えることによって、他の日本人移民とともに、《ニホンジン》としての連帯を深めていったのである。そして、ブラジルに住む日本人移民以外を全て《ガイジン (Gaijin) 》として一つのカテゴリーに括り込み、それを《ニホンジン》に対照させることに

よって、《ニホンジン》アイデンティティを明晰な型で析出させていった。各日本人移住地に日本語学校が作られたのは、こうした所以である。

しかし、1938年、ヴァルガス政権が成立すると、外国人移民に対する同化政策を含んだ、徹底したナショナリズム政策が実施され、外国語教育の禁止、外国語による印刷物の発行禁止、および外国人による集会の禁止が宣告された。つまり、日本人を含む外国人移民は、それぞれの祖国ではなく、ブラジルに対して共通の帰属意識を持つことを半ば強制されたのである。日本人移民は、他の移民集団同様、母語を用いて教育する機会を奪われたばかりか、母国に関する情報入手の手段も絶たれてしまった。

なおその一方で、二世学生たちの間では「サンパウロ学生聯盟」が結成され⁴⁾、彼らはブラジル生まれの日系二世としての生き方を模索しようとした。機関誌“GAKUSEI”の創刊号に投稿された、「我々は、血は日本人であるが心はブラジル人である。ゆえに父母の国である菊の花の国、日本を尊敬はするが、愛することは出来ない」という内容のポルトガル語のエッセイは、後に天皇に対する不敬罪である、と一世たちによって大きく批判されたが、当時、自己のアイデンティティに悩む当時の学生たちには支持された〔前山 1996:354〕。

そして終戦を迎えると、二世エリート学生のみならず、移住地において錦衣帰国を目標に農業に従事していた日本人移民も、日本の敗戦によって帰国の道を閉ざされ、ブラジルへの永住を選択する。しかし、彼らはそれまでコロニアという閉ざされた社会のなかで「ブラジルの日本」を生きてきたため、ブラジル社会で生きていくのに十分な生きる術を持たなかった。そこで、我が子のブラジル社会への参入を通して、自身の社会的地位の上昇を図る方法が採られた。すなわち、子どもをカトリック教会で受洗させたり、高等教育への送り込んだりする一方、自分たちは《ガイジン》と一定の距離を置きつつ、《ニホンジン》として固まっていくという「戦術」である。こうしてコロニアの中には再び、《ニホンジン》社会が形成されていった。

一方、《ニホンジン》意識の強い一世の親たちを尻目に、二世たちは《ブラジル人》としてのアイデンティティを高めていった。これは、戦前移民の二世も、戦後移民の二世にも共通する経験である。親たちが気づいたときは、子どもたちはすっかり《ブラジレイロ (brasileiro=ブラジル人)》になっていた。日本語の勉強を嫌い、《ニホンジン》よりも《ガイジン》の結婚相手を選び、ブラジル社会に入っていくようになったのである。しかし、ブラジル人との付き合いのなかで、いくら自分がポルトガル語を話し、ブラジルの文化や価値観を身につけた《ブラジル人》であると名乗っても、《ガイジン》との身体的・文化的差異は顕著である。また、日常的な相互作用のなかでは、《ガイジン》によって常に《ジャポネース》と呼ばれかけられており、彼らもまた、そうした呼びかけを受け入れていた。

大まかに概観すれば、日系人のアイデンティティは、このような歴史的背景によって構築されてきた。冒頭で挙げたような「消滅の語り」が行なわれるようになったのも、以上のような所以である。しかし、1990年の「出入国管理および難民認定法」の改正によって、ブラジルの日系社会はターニングポイントを迎える。つまり、日系三世までの日系人とその配偶者は、外国人としてではなく日本人の子孫として、就労ビザではなく定住ビザが与えられて合法的就労が可能になったのである。つまり、「血統」という、ある種の本質主義的な法の解釈によって、

言うなれば彼らは《日本人》の「亜流」として扱われるようになったのである。

3 「デカセギ」経験によるアイデンティティの更新

今日、日本で就労する日系人の多くは二世もしくは三世である。ポルトガル語を理解しない一世の両親に育てられた場合や、現在でも日本語が日常的に用いられている、奥地の日本人集団移住地で育った二世の場合は、日本語を話せる者も珍しくはないが、混血の場合や都会で育った場合は、ほとんど日本語を知らぬまま来日することが多く、来日後はまず、日本語という言語的障壁に直面する。

加えて、彼らの多くは、来日後、われわれ《ニホンジン》と日本の《日本人》との間には、見えないバウンダリーがあると悟る。つまり、同じ《ニホンジン》の血を引いていても、外見上は《日本人》と全く同じであっても、「われわれ」は《ブラジル人》もしくは単なる《ガイジン》であって、「純粋な《日本人》」ではないとを感じるようになるのである。在留資格上は「日本人の配偶者および子」と認められていても、一旦入国すれば他のアジア系労働者と同じく、《外国人労働者》として扱われ、日本の《日本人》からは《ガイジン》として眼差される次第となる。また職場では、これまで経験したことのないような、いわゆる「3K労働」に就かなければならないし、職場や地域社会ではしばしば「ブラジル人差別」に直面する。そしてサンバやアマゾン、サッカー、犯罪多発都市といったブラジルに対する一面的な紋切り型のステレオタイプに辟易する一方で、日本の日本人は、祖父母や両親が幼い頃から語ってくれたように、必ずしも勤勉で礼儀正しく、真面目であるとは限らないということにも気がついて失望するのである。加えて、「日本人顔」の日系人は「日本人と同じ顔をしているのに、日本語が分からない」と言う理由でしばしば差別的扱いを受け、逆にいわゆる「ガイジン顔」の日系人は、非日系と同様に、《ガイジン》として差別的振る舞いを受ける。

こうして、ブラジル日系人は日本での就労経験を契機として、《ジャポネース》や《ニホンジン》ではなく、《ブラジレイロ》に自己同定するようになる。そして、日系人の配偶者として来日している非日系や、《メスチッソ (mestiço/mestiça=混血)》の日系人とともに、出稼ぎという共通経験を軸にして結束を深めていくのである。彼らは、非日系の配偶者や《メスチッソ》と同様に、出稼ぎ経験を社会的階層移動の手段として捉えており、日本語の「出稼ぎ」を“dekassegui (以下《デカセギ》と表記)”というように、そっくりポルトガル語に転用している。そして、《デカセギ》という言葉、そうした社会的階層移動の手段のみならず、そうした労働に従事する自分たちをも示すカテゴリーとして用いることによって、集団内の結束を図ろうとするのである。このように、デカセギの日系人は、来日後、《日本人》/《外国人》という、強固で差別的なエスニック・バウンダリーに直面することによって初めて、「自分の母国はブラジルであり、自分は《ブラジレイロ》である」と自己同定するようになる。

しかし、日本では非日系やメスチッソとともに、《ブラジル人》であると自己同定していた彼らは、ブラジルへ帰国した後、再び《ジャポネース》としてエスニック・マイノリティのポジションに位置づけられることとなる。ただ、注目しなければならないのは、来日前とは異なり、彼らは帰国後、《ジャポネース》という名づけを主体的に引き受けるかのように見せかけ

ておきながら、実は、そのような名づけを客体化しているという点である。つまり、《ジャポネース（もしくはニホンジン）》でありながら、その一方で《ブラジレイロ（ブラジル人）》でもあるという、二重のポジションであり、日常生活において、「ブラジル」や「日本」の「脱テリトリー化」⁵⁾を行なうことによって、アイデンティティの束縛から解放されようとしているのである。

ゆえにデカセギ経験をもつ日系人たちは、「日本かブラジルか」といったアイデンティティの二者選択を行なわない。ブラジルにおけるマイノリティとしての両親たちの経験や、デカセギにおいて体験した差別や偏見によって、原初的紐帯のみに基づいたバウンダリーの固定性と本質性の主張が、新たな「他者」を作り出し、排除してしまうことに気がついた彼らは、原初的で客観的な属性ではなく、本人の主観で帰属し得る《ニッケイ》というゆるやかなカテゴリーを設けたのである。そして、自分自身も《ニホンジン》と《ブラジレイロ》の二者選択ではなく、都合に合わせてどちらかを選び取るという「戦術」によって、それまで悩みつづけてきた二項対立の束縛から自由になったのである。

このようにデカセギ経験を持つ日系人たちは、日本やブラジルの日系社会においてネガティブな意味合いであった日本語の「出稼ぎ」を、ニュートラルなポルトガル語の「デカセギ」に変換することによって、自身の社会的ポジショニングの上昇手段としての可能性を見出そうとしているのである。

4 日系人ティーンエイジャーの日常とサブカルチャー

一方、日本への就労経験を持つ日系人とは逆に、サンパウロ市およびその近郊に在住する日系の若者達は、一世たちと同様、日系人同士で固まる傾向があり、マスメディアではしばしば、その「閉鎖性」が取り上げられている⁶⁾。サンパウロの日系人ティーンエイジャーの多くは中流階級に属しており、親が高学歴志向であるため、小学校や中学校の段階から私学に通う傾向にある。子どもの学費を捻出するために、子どもを祖父母や親戚宅に預け、親だけが日本で働いているという家庭も見受けられる。

ゆえに、サンパウロ市内の有名進学校や予備校では、日系人の在学率が日系人口比と比べても飛びぬけて高くなり、学生時代から日系人の友達と出会う機会が必然的に多くなる。学校近くのショッピングセンターの飲食店フロアやゲームセンター、ファーストフードなどが、放課後や休日の彼らの溜まり場になっている。金曜日の夕方ともなると目に入るのは日系人ばかりということも珍しくはない。そして、市内には日系人だけのクラブ、日系人だけのディスコがいくつも存在する。週末にはほとんど日系人だけで占められた、日系人だけのイベントやパーティーがいくつも開かれている。2000人規模の動員力を誇る日系イベントも存在する。

また、彼らの行動様式や趣味嗜好にも、ある種の独自性が見受けられる。すなわち、ブラジルの流行とも日本の流行とも異なる、自分たち独自の価値観によって取捨選択された、日系人ティーンエイジャー独自の流行が存在しているのである。たとえば、日本製のサンリオやゲームキャラクターなどのマスコットを通学用のかばんにつけたり、携帯電話にプリクラや日本の携帯ストラップをつけたりするのは、日系人の若者の間だけで流通している流行である。かば

んの中には日本製のCD・MDウォークマンが入っており、ブラジルの若者の間で流行しているブラジルのポピュラー音楽よりも、日本でヒットチャートをにぎわしているJ-POPや、日系のパーティーでよく流される欧米のテクノミュージックが好まれる傾向にある。

日系人の若者によるこうしたサブカルチャーは、非日系人がなかなか介入できない領域である。なぜなら、これらのモノは、日本に住む親戚や、日本からの輸入品が多く売られている東洋人街に行かなければ手に入らないのであり、彼らにとっては親しみのあるサブカルチャーであっても、ブラジル社会一般では知名度もなく、普遍的に好まれる見込みは薄いからである。しかし、日系人のティーンエイジャーにとっては、彼らが独自に価値を見出したそうしたモノを共有していることが仲間の証拠であり、こういったサブカルチャーを非日系にも普及させようという気持ちはあまりないといえる。では、子どもたちは、なぜ独自の様式を作り、日系人同士で固まるのだろうか。またその根底にはいかなる体験があるのだろうか。

5 まなざされる身体的差異

筆者の実施したインタビューでは、若年層に限らず、あらゆる世代の日系人が意識する非日系ブラジル人との差異としては、生活習慣上の差異と並んで、身体的差異が挙げられることが明らかになった。ブラジルでは、現在も日系人であれば、《ジャポネース》と呼ばれるのが常である。そして、《ジャポネース》を表象するとき、しばしば用いられるのが“olho puxado”、すなわち「つりあがった細い目」である。たとえば、非日系が日系人の真似をするときは、決まって目を吊り上げながら、Rの音をわざとLと間違えて、語尾に *né* を多用する⁷⁾。

前述のとおり、二世以降の世代の日系人は、「ブラジル人になろう」としてきた。高等教育への進学によって、ブラジル社会の各分野に進出したのみならず、ブラジルの慣習を積極的に取り入れ、ブラジル人と交際することでブラジル社会への一員になろうと努力してきた。しかし、いくらブラジル人になろうとしても、彼らは常に民族的他者としてまなざされる存在であり、《ブラジレイロ》という主体である以前に、《ジャポネース》として表象されてきたのである。つまり、彼らは非日系、すなわち彼らの語彙によるところの《ガイジン》のまなざしによって飼い慣らされた、勤勉な《ジャポネース》になってきたのである。それは学校教育の段階から始まっている⁸⁾。

またブラジルでは、最近まで国内の主なマスメディアの中には、日系人の芸能人やモデルはほとんど見られなかった。映画やドラマの主人公は決まってドイツ系やイタリア系であり、ごくたまに出てくる日系人は「無名の勤勉で従順なジャポネース」であった。日系人の役柄に、「美しい」「勇敢な」などといった形容詞がつくことはほとんどありえなかった。つまり、《ジャポネース》は、いやでも他者、すなわちブラジル人によってまなざされた身体的差異を自覚せざるを得なかった。メディアによって、学校（教育）によって、ポルトガル語という言語によって《ブラジル人》として内面化させられても、彼ら日系人たちは、自分たちがブラジル社会の真の成員であるとは感じられなかったのである。

日系人の若者世代が、親たちが使っていた日本語の《ガイジン》/《ニホンジン》概念を流用しているのも、以上のような理由であると筆者は考える。ブラジルでは、ほとんどの日系人が、

非日系を《ガイジン》と表象する。若者たちはしばしば、「本当はこの国では自分たちが《ガイジン》なんだけど」と語る。しかし興味深いことに、この《ガイジン》カテゴリーには、中国系や韓国系などのアジア系は含まれない。おそらく、彼ら自身もマージナル化された存在であり、彼らが日系人をマージナル化することはないからであろう。

こうして、ブラジルの日系人は、《ジャポネース》という名づけによってブラジル社会から周縁化しようとする非日系のブラジル人たちを、《ガイジン》というマージナル化されたポジションに配置し、そして自分達を《ニホンジン》と再定義することによって、中心の位置をずらしそうとしているのである。

子どもたちは、自分たちを従順な《ジャポネース》に仕立て上げようとする大文字の他者に抵抗する。そうした中、子どもたちが目をつけたのが、日本との連続性である。なぜなら今日、ブラジル社会では、日本は米国と並ぶ最先端の技術発展国であるが、ブラジル人にとっては、米国よりもさらに遠く、日系人以外ではアクセスしにくい国であるということで、さらに希少価値を高めているからである。こうした日本との連続性は、相対的に日系人のポジショニングを高めることになる。

6 Comunidade Nikkei と Colonia Japonesa

このように、今日の若い世代の日系人たちは、親や祖父母達が作り上げてきた日系社会、すなわち「コロニア (colonia)」とは異なるやり方で、「コムニダーデ・ニッケイ (comunidade nikkei= nikkei community)」という共同体を想像／創造してきた。第一世代の祖父母たちはブラジルにしながら、日本を想像／創造し、そして《ブラジルの日本人》という集団的アイデンティティを立ち上げることによって地位の向上を図ってきたし、二世の親達は、黙って「ブラジル」を受け入れ、そして勤勉たる《ジャポネース》になることでホスト社会への参入を図ってきた。しかし、戦前移民の三世、および戦後移民の二世にあたる今日の日系人青年たちは、親や祖父母の世代とは異なるやり方で、アイデンティティを構築している。つまり、トランスナショナルな状況を利用しつつ、親や祖父母達の《ニホンジン》とも、ブラジル人による《ジャポネース》という名づけとも異なる、《ニッケイ》という新しいアイデンティティを構築しているのである。では、彼らが創造しようとしている《ニッケイ》もしくは「コムニダーデ・ニッケイ」は、親や祖父母の代の日系社会、すなわち日系コロニア (colonia japonesa) や、非日系の名づけによるところの《ジャポネース》とは、どのような点で異なるのだろうか。

端的に言えば、「コムニダーデ・ニッケイ」が従来のコロニアと異なる点は、日本に対する態度である。つまり親達とは異なったやりかたでの「ニホン (Nihon)」を流用しているといえる。従来の日系社会、すなわちコロニアは、海外の中の日本、いわば日本の飛び地であったため、「正しく日本を継承していること」に力点がおかれ、日本語や日本人としての「血」が重視されてきた。よって、日本語が話せない二世や、非日系と結婚した日系人が離れていったのは、このような理由によるものである。

しかし、今日の若い日系人たちにとっては、「日本」は同一化を願う対象ではない。むしろ彼ら自身がブラジル社会の成員となるための手段として、「ニホン」を客体化するのである。

また、コムニダーデ・ニッケイは、コロニアの言説では排除されていたメスチッソや中国系や韓国系、そして時にはこうした共同体への参入を希望する非日系さえも迎え入れるようなカテゴリーであるという点でも、従来のコロニアとは異なっている。従来、ブラジルの日系社会は、非日系や混血者に対して排他的であり、アジア系に対してはさらに強い偏見があったことは事実である。しかし、コムニダーデ・ニッケイは、こうした人々に対しても開かれている。

つまり、《ニッケイ》とは、ブラジルの日系人がブラジルでブラジル人として生きていくための、アイデンティティの一つの戦術であり、硬直した《ブラジル人》というカテゴリーを打ち破るべく、《ニッケイ》というエスニシティを打ち立てているのだと言える。そういう意味では、民族的他者を《ガイジン》という一つの固定的なカテゴリーに押し込める一種のアイデンティティ・ポリティクス的な彼らの行動も、アイデンティティをめぐる戦術の一つとして理解できる。つまり、《ブラジル人》という大文字の他者による《ジャポネース》という名づけ、すなわちカテゴリー化に抵抗して、戦略的にニッケイ同士で固まって、その名づけを日本語の《ニッケイ》と読み替えて、抵抗しようとしているのではなかろうか。

このように解釈すれば、冒頭に紹介した日系人の若者達のグループ化も、独自のサブカルチャーの形成も、決して理解不可能ではないし、本質的で固有なものではない。そして、日本語に重点をおき、《日本人》の「血」を引く者だけを成員と認めるような旧来の「コロニア」に代わって、若い世代による、新しい形の共同体（コムニダーデ）が次第に形成されつつあるのである。

《ニッケイ》は今日のグローバリゼーション状況が生んだ、新しいエスニシティである。しかしそれは、グローバリゼーションによってもたらされた流行のエスニシティであるというよりも、既存の民族的権力関係に絡めとられないための抵抗の戦術が、グローバリゼーションの後押しによって容易になったもののだと言える。

たとえば、ブラジル日系社会の中心的存在である「ブラジル日本文化協会（文協）」は、1997年から青年部に相当する「セイネンブンキョウ」⁹⁾を組織しているが、彼らは、「『日本文化』でも『ブラジル文化』でもない、『日系ブラジル文化 (cultura nipo-brasileira)』こそが、自分たちがブラジル社会において普及させるべき文化である」¹⁰⁾として、文協を中心とする日系団体のイベントに協力するほか、さまざまな独自の活動に取り組んでいる。また、日系人医・歯学部生が中心になって結成されたABEUNI (Aliança Beneficente Universitária de São Paulo) では、貧困地域での無料医療巡回活動や、その活動資金を集めるための各種チャリティーイベントの実施を通して、日系社会の内部にとどまらず、ブラジル社会への貢献に目を向けようとしている。《ジャポネース》でありながら《ブラジレイロ》でありたいと願う《ニッケイ》は、新たな生き方を模索しているのではなかろうか。

おわりに

《デカセギ》という共通の経験から非日系と連帯しようとするデカセギ経験者たちにも、アジア系をはじめとする非日系の者とも手を結んで緩やかなエスニシティを構築しようとする若者たちにも共通するのは、不利な立場にある自らのポジションを覆すために、抵抗の戦術とし

て日本やブラジルを客体化した《ニッケイ》というエスニシティを生み出していることである。

デカセギ経験者達と若者達がそれぞれ想像／創造する《ニッケイ》は、一見相容れないものに見えるかもしれない。しかし単一ではない、そうしたアイデンティティの複数性、つまり「複数形としてのニッケイ (os nikkeis)」こそが、他者を抑圧しない、ブラジル日系人の新しいエスニシティの特徴であろう。

<注>

1)本稿は、2001年6月06日、第4回国際文化研究会例会での発表原稿をもとに、ブラジルでの現地調査（調査期間：2001年12月10日～2002年3月5日）の知見を取り入れて、現地にて補筆・修正を加えたものである。なお、本調査の実施にあたっては、1998年～2000年度文部省科学研究費補助金ならびに2001年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員特別奨励費）の助成を受けた。

2)「戦術」とは、権力の不在によって規定される、「自分のもの（固有のもの）を持たないことを特徴とする計算された行動」[セルトー1987:101]を意味する。すなわち、「自分にとって疎遠な力が決定した法によって編成された土地、他から押しつけられた土地でなんとかやっていく」[セルトー1987:102]方法である。

3)本来、錦衣帰国ではなく「錦衣帰郷」であるが、移民の心象風景の中で、日本がイメージとして消化されてくるにつれ、帰郷が帰国に変化してきた[前山1996:28]。

4)サンパウロ学生聯盟には、当時、日系学生の9割までが参加していた[前山1996:358-359]。

5)脱テリトリー化とは、ヒトや組織や技術のシステムが発祥地（始まったもとの場所）を離れて、別の場所で新たな展開を見せる現象であり、「脱ボーダー化」とも言う[江淵1998:45-46]。

6)ブラジル国内で最も発行部数の高い日刊紙、Folha de São Pauloでは、2000年11月6日付の別刷り特集にて、日系若者の風俗・文化についての特集記事を組み、日系社会では大きな反響を呼んだが、ポルトガル語による日系の新聞、Jornal Nippo-Brasil（週刊）でも、2002年1月30日付の特集記事にて同様の特集を組んでいる。

7)ポルトガル語においても、文末に né (não é? の短縮形で、英語の付加疑問文、isn't it? に相当) がしばしば用いられるが、これは、日本語の終助詞、間投助詞の「ね」と音韻上も語法上も似ていることから、日系人の間では特に多用される傾向にある。それゆえ、非日系のブラジル人が日本人のポルトガル語を真似する際は、語尾にné が多用される傾向にある。なお、“né”と「ね」の用法については、サンパウロ大学大学院哲学・文学・人文科学研究科修士課程にて対照言語学を専攻する、向井裕樹氏の教示を得た。

8)通訳・翻訳業を営む日系二世（聞き取り当時36歳）の女性は、次のように語る。「日系人はずっとブラジル人からなめられてきた。ブラジル人は、私たちをまじめだ、いいやつだとさんざん持ち上げておいて、気がついたら、面倒な仕事はすべて私たちニホンジンに押し付ける。私は子どもの頃からいつもそういう経験をしてきた。グループ学習でもクラス行事でも、ブラジル人は、『ジャポネースにさせておけばいい』って遊んでばかりいて、ニホンジンの子ども

たちは文句も言わずに黙って働いていた。ニホンジン、子どもの頃からそういう役回りを引き受けてきたのよ。」 また、薬剤師の資格をもち州立研究所で主任研究員として働く別の日系三世の女性（聞き取り時点で37歳）は、次のように語る。「ブラジルでは、ニホンジンは勉強が出来て当然、真面目に働いて当然って思われている。だからいいことをしても目立たないけど、悪いことをしたらすぐ目立ってしまう。『ジャポネースのくせに』って。」

9) 筆者は2002年1～2月にかけて、セイネンブンキョウにて、参与観察を行った。セイネンブンキョウの活動については、別稿にて論じる予定である。

10) 2002年度セイネンブンキョウ会長、クリスチーナ・アガリ氏のインタビューから。なお、他のメンバーもよくこの言葉を口にしており、「ブラジルにおける『日系ブラジル文化』の普及」が彼らの共通見解となっていることがうかがえる。セイネンブンキョウでは「日系ブラジル文化」を、「両親や祖父母から受け継いだ日本の伝統文化と、自分たちが親しんでいるブラジルの文化が融合してできた文化」と捉えている。なお、筆者は参与観察中、メンバーから人類学者として「日系ブラジル文化とは何か？（O que é Cultura Nipo-Brasileira ?）」というテーマで講演をするよう依頼され、講演を引き受けた。紙幅の関係上、講演および講演後の質疑応答の内容についてはここでは省略するが、メンバーたちは「『日系ブラジル文化』の普及こそ、セイネンブンキョウの『使命』である」と考えていることが、筆者には大変印象的であった。

<参考文献>

- 移民八十年史編纂委員会編、1991、『ブラジル日本移民八十年史』、ブラジル日本文化協会。
- 江淵一公、1998、「トランスカルチュラリズムの研究——文化人類学・異文化間教育学の視角」、江淵一公編著、『トランスカルチュラリズムの研究』、明石書店、21-78頁。
- 斉藤広志、1970、『バルガス以後—ブラジルの政治と社会（1930 - 1969）』、社団法人ラテンアメリカ協会。
- サンパウロ人文科学研究所、1987、『ブラジル日系人実態調査報告書 1987-1988』。
- サンパウロ人文科学研究所、2001（未刊行）、『日系社会実態調査中間報告書』。
- セルトー、ミシェル・ド（山田登世子訳）、1987、『日常実践のポイエティック』、国文社。
- 半田知雄、1970、『移民の生活の歴史——ブラジル日系人の歩んだ道』、サンパウロ人文科学研究所。
- 前山隆、1996、『エスニシティとブラジル日系人——文化人類学的研究』、御茶ノ水出版会。
- 山田睦男編、1986、『概説ブラジル史』、有斐閣。
- 山ノ内裕子、1998、「『日系ブラジル人』とは誰か——在日日系ブラジル人をめぐる『戦略』と『戦術』——」、江淵一公編著、1988『トランスカルチュラリズムの研究』、明石書店、253～267頁。
- Folha de São Paulo, 2000, 'Sou Sansei', in *Folhateen*, 2000.11.6.
- Hall, Stuart, 1996, 'Introduction: Who Needs "Identity"?', in Hall & du Gay, P (eds.) *Question of Cultural Identity*. London: Sage, pp.1-17.
- Jornal Nippo-Brasil, 2002, 'Essa . Minha Turma', in *NippoJovem*, 2002, 1.30.

NIKKEI: New Ethnicity of Japanese-Brazilians

Yuko YAMANOUCHI

This paper examines, from an anthropological perspective, a new ethnic phenomena among young Japanese-Brazilians. This new ethnicity is called “Nikkei” and appeared in Brazil at the same time as did “globalization,” a phenomenon that include a labor migration Brazil to Japan that began in the late 1980’s. It had been said that the “Issei” (first generation) identify as “Nihonjin”(Japanese) in order to contrast themselves with “Gaijin” (non- Japanese descent), while the “Nisei”(second generation) suffer conflicts between Japanese and Brazilian identities.

“Nikkei” is different from the ethnicities described above in that it tries to negotiate a dualistic discourse of identification, Japanese or Brazilian. If anything, Nikkei take advantage of their privilege to access to both Brazil and Japan and they never adhere to one ethnicity, but choose their own identity situationally.

This study examines the new ethnicity of Japanese Brazilians via two cases of the young Japanese Brazilians who live in São Paulo and of the returnees from Japan, as “ex-Dekasseguis”(ex-migrant workers, in Portuguese).